

《研究ノート》

核実験避難島マーシャル諸島メジャト島の現在

中原 聖乃*

要約

マーシャル諸島共和国は、1986年にアメリカから独立した太平洋に浮かぶ小島嶼国である。標高2m程度のサンゴ島が連なった環礁で形成されている。人口は現在推定で6万人近くとなっている。人々は、脆弱な環礁で生きる知恵を数世代にわたって作り上げ、継承してきた。しかしながら、環礁は核実験にとって都合がよかった。太平洋の真ん中での核実験なら、爆発の残骸は深海に沈んでしまい、破壊力の正確な観測は難しいだろうが、水深数10mの環礁なら回収が可能で、爆発が環境に及ぼす影響を見るのが容易だからである。1946年から58年まで、アメリカは67回もの核実験を繰り返した。

第五福竜丸などが被ばくした54年のビキニ環礁でのブラボー水爆実験では、実験場から210km東のロンゲラップ環礁の住民が死の灰にさらされ、急性放射線障害を発症し、3日後にアメリカ軍により救出された。アメリカの公文書は、この時計測した地上空間線量が毎時10mSvから23mSvであったことを示している。人々は、3年後に故郷へ帰還したが、出産異常やガンなどの健康被害が続出した。その後、公表された放射能の高さから、85年に再避難し、以後は故郷から210km南のクワジェリン環礁メジャト島 (*Kuwajleen, Mejatto*) を中心的居住地として避難生活を続けている。本稿は、2013年夏、および2014年夏に筆者がおこなった現地調査の報告である。

1 はじめに

本稿は、米国の核実験により被害をうけたマーシャル諸島ロンゲラップ (*Rongelap*) コミュニティの現在の避難地であるクワジェリン環礁メジャト島の動向を、2013年の夏季調査で得られたデータを中心に報告する。

1946年から58年まで、アメリカは中部太平洋マーシャル諸島で67回もの核実験を繰り返した。第五福竜丸などが被ばくした54年のビキニ環礁でのブラボー水爆実験では、実験場か

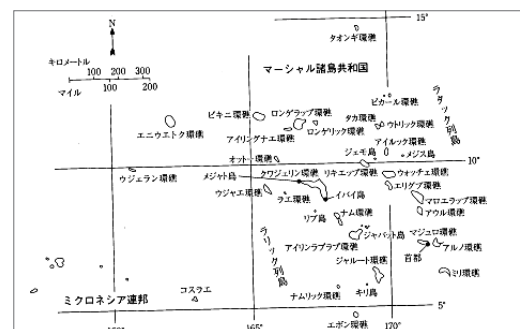


図1 マーシャル諸島地図¹⁾

*関西学院大学 災害復興研究所 研究員



図2 メジャト島遠景



図3 昼下がり木陰で遊ぶ子供たち

ら210km東のロンゲラップ環礁の住民が被ばくし、急性放射線障害を発症し、3日後にアメリカ軍により救出された。アメリカの公文書によれば、この時計測した地上空間線量が毎時10mSvから23mSvあったことを示している。人々は、3年後に故郷へ帰還したが、出産異常やガンなどの健康被害が続出した。その後、公表された放射能の高さから、85年に再避難し、以後は故郷から210km南のメジャト島を中心的居住地として避難生活を続けている。

本稿では、2013年8月から9月にかけて筆者が行った調査結果から、メジャト島の地理と暮らしの様子、メジャト島の人口動向、メジャト島の生活の活性化、メジャト島と他島との関係について記述する。

2 避難地の地理

ロンゲラップコミュニティの人口は約2000人である。現在故郷を離れた共同体の人びとは、米国やマーシャル諸島の全土に居住しているが主にメジャト島、イバイ島、マジユロの3カ所にそのほとんどが居住している。

ロンゲラップコミュニティの中心的居住地は、1985年にロンゲラップ環礁から集団移住して以来、クワジェリン環礁メジャト島である。メジャト島は本来、四つ西に位置しているエバドン島の人々の生活圏であったが、1985年の移住からロンゲラップ地方政府がリース料を支払っている。

メジャト島は、首都マジユロからは450km北西に位置している。首都マジユロからメジャト島へは空路で1時間半である。エレナク島にある滑

走路に到着するが、ここからボート（所要時間20分）でメジャト島に行くことができる。また、空路クワジェリン環礁クワジェリン軍事基地に向かい、そこからイバイという町に連絡船で渡り、ボートをチャーターする方法（所要時間4時間）もある。

メジャト島の面積は、0.23km²である。ここには207人が居住し（2013年8月20日現在）、33戸の世帯を形成している。島には、西地区と東地区があるが、これは単なる行政上の区分ではなく、クリスマス祭礼や日常的共同作業、教会への貢献などの基準の単位としても機能している。

島の中央にはエレメンタリースクール²⁾、診療所、連絡用ラジオステーション、警官詰め所、野球場、バレーボールコート、バスケットコート、食糧保管庫など公共施設がある。エレメンタリースクールには、約100名の児童が学んでいる。

学校や病院などの公共施設の電気はソーラー発電と風力発電で賄っている。無線のラジオ通信が唯一の離島と外の世界を結ぶ通信手段となっている。

一般の家庭は、ベニヤ板とトタン屋根で作った簡単な住居である。近年ではコンクリートの床をしつらえる世帯もある。炊事小屋は大抵別の場所に作られている。メジャト島ではトイレのある世帯は2世帯しかない。それ以外はすべて林の中か夜間の砂浜で用をたす。住民の日常生活用の公共機関としてのガス、水道、電気はない。一般の家庭では、以前は灯油ランプが主流であったが、現在では自家発電機やソーラー発電機を設置している家庭がほとんどである。一般住民の生活水は、淡水地下水と雨水を使っている。雨水や屋根に降った雨をタンクに貯め、飲料水、食器の洗浄



図4 島の中心部



図5 島の中心部の診療所とラジオステーション

などに使っている。淡水地下水は、洗濯、水浴びなどに使用される。

食糧は、主食の米や小麦粉はほとんどをアメリカからの援助に依存している。以前は、副食も缶詰が多かったが、現在では、魚介類、ココヤシの実 (*ni*)、パンノキの実 (*ma*)、パンダナスの実 (*bob*) などのローカルな食糧が半分以上を占めている。朝食は大抵パンケーキ、ドーナツのいずれかに紅茶である。昼食と夕食は、ご飯、干し魚にコプラ (*waini*, ココナツの白い胚乳部分を削ったもの) をかけて食べたり、あるいは、ゆでた魚、揚げた魚などに醤油をかけて食べたり、シーチキンやマグロの缶詰、スパム、コーンビーフなどを食べたりする。

3 10年間の移動

1998年8月の人口は44世帯333人であった。2002年には52世帯371人にまで増加した³⁾。これは、メジャト島改善プロジェクトで各世帯に支給された10万円で、家屋建設のための資材を購入

したためである。食事のほとんどが、「スパム」と呼ばれるランチョンミート、サバ、鶏肉、シーチキンなどの缶詰であり、現地住民の漁撈活動による魚を食べることはめったになかった。

2013年8月には、メジャト島の人口は207名33世帯に激減していた。村の中は以前のような人通りはなく、閑散としているイメージがあった。ただし、子供の数はそれほど減ってはいなかった。人口減は首都マジュロ、イバイ、海外への移住の結果である。マーシャル諸島の離島では、50歳を超えて健康に不安を抱えると病院のある都市部に移住することが多く、島には子供たちの姿が目立つ。

表1 メジャト島人口推移 (1998-2013年)

	1998年	2002年	2013年
人口	333	371	207
世帯数	44	52	33

表2 メジャト島の世帯推移 (2002-2013年)

地区	世帯	家屋数	人数	地区	世帯	家屋数	人数
東地区	1	12	1	西地区	32	12	
	2	10	7		33	7	
	3	14	5		34	5	
	4	9			35	5	7
	5	7	8		36	13	16
	6	11			37	2	
	7	3			38	5	
	8	7	19		39	5	5
	9	10	3		40	8	
	10	9	12		41	3	11
	11	1	1		42	3	7
	12	7	11		43	7	7
	13	7	1		44	12	6
	14	10			45	10	6
	15	7	3		46	7	3
	16	2			47	4	1
	17	2			48	4	
	18	4	5		49	4	
	19	2			50	13	3
	20	9	5		51	7	
	21	7	7		52	4	
21-1		5			371	207	
22	5	6		注) 空欄は空き家			
23	4						
24	17	13					
25	10	9					
26	6	4					
27	9	5					
28	5						
29	6	4					
30	3						
31	16	1					



図6 空き家になった家

この10年間で避難島の人口は減ったものの、次にみるように、島の中の日常的な活動と隣のエバドン島との関係性の側面からみると、むしろ生活は活性化している。

4 避難地で行われていること

メジャト島は無人島であったために、食料に適した、ココヤシ、パンノキ、タコノキ、といった植物はほとんど生えていなかったためメジャト島への移住後から植林が開始されるようになる。この植林活動は、2002年以降活発化する。

植林の仕方は、まず灌木や雑草を取り除く。ココヤシとパンノキは種を発芽させて苗木にし、植林するが、タコノキは挿し木をする必要がある。タコノキの実が熟して自然落下した種から成長したタコノキは、食用に適した果実が実らないからである。食用に適した果実を実らせるには、日本のソメイヨシノのように、挿し木をして育てる必要があるので手間がかかる。

植林して成長した木の実から、保存食を作る。ココヤシの実からは、「アメタマ (*ametama*)」と呼ばれるキャンデーが、ココヤシの幹の樹液からは各種ココヤシシロップが作られる。パンノキの実からは「ビーロー (*bwiro*)」と呼ばれる発酵保存食が作られる。タコノキの実からは、「ジェンコン (*jaankun*)」という保存食ができる。



図7 植林前に灌木や雑草を取り除いた場所



図8 タコノキの植林用苗木作り



図9 植林後のタコノキ林



図10 ビーローを作るためのパンノキの実の処理



図 11 ビーローの発酵をうながす



図 14 個人での漁



図 12 タコノキ羊羹づくり



図 15 各世帯に届けられる大量の魚



図 13 完成したタコノキ羊羹を手にする男性



図 16 魚をさばくのは男性の仕事

漁労活動が2002年の調査時に比べて格段に増加していた。これは以前はわからなかった潮の流れなどがかなり理解できるようになってきたために、漁労活動の回数、範囲とともに増加したと考えられる。



図 17 干物にされた魚



図18 コプラの輸送

2012年よりコプラ生産とコプラ輸送が開始された。コプラとはココヤシの実の果肉を乾燥させたもので、マーガリンや石鹼の原料として海外に輸出されるもので、マーシャル諸島の離島における貴重な現金収入である。ココヤシの実の果肉部分を削り出し、天日干しにしたり、燻煙して、水分を蒸発させる。そして麻袋に詰め保管する。1年に4回程度回ってくるコプラ運搬船に載せて現金と引き換える。13袋作った男性は、360ドルの稼ぎがあったと自慢げに語った。ただし、マーシャル諸島の多くの離島では、1人の男性が1回に100袋程度生産するが、メジャト島では数袋にとどまっている。

ココナッツや食料、植物を植えるようになってくると、コプラをはじめとする植物をブタの餌にまわすことが可能になり、ブタを多数飼育することが可能となる。

ブタが増加すると、エバドン島の人たちとの間で、対等にブタを交換することができる。例えば、メジャト島で誕生日の儀礼のためのブタが必要になっても、メジャト島に大きなブタがなかったら、エバドン島の大きなブタを1頭譲り受ける。数カ月後、メジャト島のブタが大きくなったら、これをエバドン島に返すという単純な仕組みである。メジャト島ではこれまでこうした贈与関係に参入することはできていなかったが、贈与関係における対等な関係性が回復しつつある。

メジャト島の人々は、船もあり、被ばく補償金も入るので、商店を経営する人が多い。エバドン島の人がこの商店を利用するようになるが、その後、この商店を経由して商品を購入し、エバドン島で商店を開いた人もいた。



図19 増えたブタ



図20 エバドン島にある移住直後に亡くなったロンゲラップの人の墓



図21 エドバン島から送られた苗によって育ったタコノキ



図22 メジャト島で商品を購入し、エドバン島に持ち帰る男性

タコノキ羊羹をはじめとする保存食の生産が積極的に開始されるようになった背景には、避難島の周辺の島々との関係性の構築がある。1985年の避難島への移住時には、エバドン島の人たちの生活圏であった無人島は、生活に必要な木がほとんど生えていなかったという。人々はブルーシートで雨をしのぎながら、家屋を建築するための場所を作るために、木を伐採することから始めた。3年ほどですべての住民の家の建築を終えた。この間、避難島の潮の流れを知らないために、溺れて命を落とす人もいたし、エバドン島の人々がロンゲラップの人々の死者の埋葬や、周辺海域での漁撈活動に難色を示したりしていた。

しかし、さまざまな関係性が生まれるに従いこうした不便な状況に変化が見られた。第一はエバドン島住民と避難島住民との間の婚姻関係の成立である。婚姻関係成立ののちには、米国からの援助食糧や医薬品がエバドン島にももたらされるようになった。また避難島で催されるパーティーなどに、エバドン島の人が招待されることもあった。第二は、2001年まで運行していた「リマナマン号」へのエバドン島の人々の同船である。この船は、日本のNPOが廃船になった漁船をメジャト島に贈ったもので、クワジェリン環礁の西の端にすむ人々が都市部に出かける際の足となっていた。こうして育まれた関係性によって、死者の埋葬が許可され、漁撈活動の範囲の拡大につながったのである。

5 メジャト島で生産された食料、および保存食の分配

避難島で生産された保存食が分配される中で、都市部の人々は、避難島で作られたタコノキ羊羹の分配を受けるとともに、そのタコノキ羊羹を作った人の名を一緒に記憶する。現在人々が、ロンゲラップの他の人々との日常的な関係性を構築、および維持することが可能となっているのはタコノキ羊羹を求めることによってである。避難島で作られたタコノキ羊羹の5分の4は、避難島以外のイバイ、マジユロ、他の環礁、ハワイおよび米国のいくつかの場所に住む人々にも分配されている。多くは自身の子供、配偶者の兄弟姉妹や



図23 夏季休暇を過ごしたメジャト島からイバイ島へ帰る親子



図24 メジャト島の保存食を船に乗せて娘に送る



図25 メジャト島から持ち帰った食料



図26 魚の干物とココヤシをもらいに来る夫の親族

その子供たちなどである。避難島で生産したタコノキ羊羹の多くが分配に回されることで、結束力が強まり相互性を生み出している。

2012年暮れから2013年7月にかけての半年間メジャト島ではほとんど雨が降らなかったため、干ばつのため地下水が塩害を受けた地域に住んでいる人はタコノキの実が実らず、タコノキ羊羹の生産を行わなかった。しかしながら、塩害の被害を逃れた地域ではタコノキ羊羹を作っていた。10個以内にとどまる人がいたが、35個生産したという人もいた。この世帯では、1個は子供たちに食べさせたが、34個は、イバイとマジユロに住む近い親族に分配していた。夫婦の子供、夫婦のそれぞれの兄弟姉妹、親、祖母であった。

そのほかの多くが少なくとも、生産したタコノキ羊羹の半数をメジャト島以外の親族に送り届けていた。

6 今後の課題

2011年にメジャト島から米国に移住した女性が避難島のメジャト島について語った。

メジャト島は私にとってカピジクネン (*kapijukunen*) なの

カピジクネンとは、住処、故郷など、住むための場所という特別の意味がある。土地を購入したり、個人所有したりする慣習のないマーシャル諸島では、母系的に土地の権利を相続する。マーシャル諸島の人々は、とりわけ土地権を持つ母系親族の共有地を重視する。

ロンゲラップ出身者にとって、ロンゲラップはカピジクネンと捉えるのはむづかしいという。「確かにロンゲラップは私の土地だけど……もう住むことはないね」とその女性は答えた。ただし、すべての女性がメジャト島をカピジクネンと考えているわけではない。今、3人のメジャト島在住の女性がロンゲラップで働く夫のもとで生活を送っている。このなかのひとりの女性は、2002年メジャト島での筆者のインタビューに対して、ロンゲラップへの帰郷を強く希望してい

た。「子供たちに故郷であるロンゲラップで暮らさせてあげたい」というのがその理由であった。この女性にとっては、メジャト島ではなく故郷ロンゲラップが「カピジクネン」なのである。

おそらく現在は、メジャト島がカピジクネンになっていく過渡期なのだと考えられる。マーシャル諸島の人々にとって、カピジクネンとは、住む場所であり、住む場所とは親族や周辺の島の人々との関係性の中に創られていくものである。カピジクネンが創られていく過程を、メジャト島の生活実態と、関係性をさらに調査して、明らかにしていきたい。

謝辞

本論のもとになった調査は「ポスト被ばく社会の再生における『つながり』に関する歴史人類学的研究」(二〇一三年度～二〇一五年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究代表者:中原聖乃)の助成により可能となった。ここに記して感謝いたします。

注

- 1) 出典:中原聖乃『放射能難民から生活圏再生へ——マーシャルからフクシマへの伝言』法律文化社、2012年、iv頁。
- 2) マーシャル諸島の教育制度は、8年制のエレメンタリースクール4年制のハイスクール、2年生の短期大学に区分される。ハイスクールでの勉強が困難だと思われる場合には、入学前に1年間のインターミディエイトスクールに通学することもできる。このうち、義務教育は、エレメンタリースクールのみである。
- 3) 1999年に行われた国勢調査の結果は400人となっている(Republic of the Marshall Islands 1999: 382)。

参考文献

中原聖乃『放射能難民から生活圏再生へ——マーシャルからフクシマへの伝言』法律文化社、2012年。

Republic of the Marshall Islands
1999 1999 Census of Population and Housing Final Report.
Office of Planning and Statistics.